

12月4日〜10日は、第57回人権週間です。

人権とは、すべての人が生まれながらにして持つ人間としての尊厳と平等で譲ることのできない権利。みんなの人権を守り、笑顔があふれる社会をめざしましょう！

平成17年度全国中学生人権作文コンテスト石川県大会
金沢地方事務局長賞（石川県代表作品として全国大会へ）

「祖母の笑顔のために」

七尾市立中島中学校 三年 島田 涼花

高齢化社会。今、この言葉に込められてきている意味は、あまりにも浅いと思う。

私の祖母は認知症だ。つい最近まで痴呆と呼ばれ、物忘れなどの症状がよく知られている。認知症はそれまで何事もなかった祖母を突然襲った。初めは同じ事を何度か聞くようになっていった。思った程度で病気だとは思わなかった。しかし、やはりおかしいと気づき、私が認知症という名前を知った頃には、祖母は今日が何日なのかわからない所まで既に悪化していた。それから、祖母の症状悪化をできるだけ遅らせようと祖母本人、そして私たち家族の認知症との闘いが始まった。

「今日、何曜日？」

「木曜日だよ。」

「明日、金曜日だね？」

「そうだよ。」

普通一日に一度でいい会話だが、我が家では祖母がすぐ忘れてしまうため一日に何度も繰り返し返される会話だ。祖母が認知症になって初めの頃は、私も何度聞かれてもしつかりと

答えていた。

しかし、祖母の認知症は季節が巡る度に悪化し、私は祖母との会話に苛立ちを感じるようになっていた。

「今日、木曜日？」

「うん。」

「明日、金曜日だね。」

「そうだよ。」

たった数分後、祖母がまた聞いてくる。

「明日、土曜日だよね。」

「明日は金曜日だよ。」

「今日、金曜日と違うか？」

さっき言ったのに・・・これが毎日、何回も続くので、ついダメだとわかっていても、無視してしまったり、「うるさい！」と怒鳴ってしまふことの方が多くなった。その後、申し訳なさそうな顔で寂しそうにちよこんと座っている祖母を見る度、心の中が罪悪感でいっぱいになった。悪いのは祖母ではなく私だ。わかってはいるのに「ごめんね」と言えない自分がすごく情けなかった。どうすれば祖母に優しくできるのかを考え始めた矢先、祖母が認知症

になったことで一番苦労しているであろう母が、つぶやくようにぼつりと言った。

「こんな風になってしまふのも病気だから仕方ないね。認知症は治る事はないけど、これ以上ひどくならないように、ちよつとでも遅らせてあげよう。だから面倒かもしれないけど何か聞かれたら答えてあげてね。」

この言葉で私の心に何か突き刺さり、目が潤むのがわかった。自分の都合で祖母を避けた事、祖母の寂しそうな姿、謝れない自分。どれだけ祖母を傷つけてきたのかと思うと、やり場のない後悔だけが残った。そんな私とは反対に、看護師である母は知識もあるだけに一番必死だ。ハードに働いて、疲れているのに、祖母を一番気にかけている。誰よりも辛い思いをしているのは母だ。それを毎日見ていたのに、私はその横で何をしていたのだろう。会話ひとつに苛立ち、祖母を思いやる事は何一つしていない。祖母にも母にも、ただただ申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

それから母の言葉を胸に刻み、私は心を入れかえ、出来るだけ祖母と会話を持つようにした。少しでも多く頭を働かせて、悪化を遅らせるためだ。祖母が聞いてきた事にはちゃんと答え、そして私からも話しかけ

るようにしている。今まで避けられてきた分、私が答えてくれるのが嬉しいのか二言、三言の会話でも祖母は本当に嬉しそうに笑ってくれる。気づけば面倒とは思わなくなり、苛立つ事もなくなっていた。

きっと私は祖母が認知症という病気を背負ったことで、認知症という枠の中にいる祖母しか見ていなかったのだ。祖母は認知症であっても、私の大切な祖母であり、家族だ。それなのに家族である私が一番、認知症だから、と冷たい視線を送っていたのだ。今まで祖母はどんな気持ちでいたのだろうと思うと、たまらなくなる。しかし、これからは今まで悲しくさせた分、祖母が幸せに生きていけるように、できる限りの事をしていきたいと思っている。

今、日本は「高齢化社会」と言いつつも、この言葉をただ「高齢者が多い社会」という意味でしか使っていない気がする。私は認知症の祖母と接して、祖母のような高齢者、また認知症等を持った人の為にも、高齢者に優しく、高齢者が笑って過ごせる、そんな高齢化社会が本当なのではないかと思う。しかし、そんな人達がどんどん犯罪に巻き込まれているのが現実だ。そんな高齢者を守るのも高齢化社会となった国の義務ではないだろうか。

私には、社会を変えるだけの力はないが、私が思う本当の高齢化社会に近づくため、まずは祖母が毎日を笑顔で過ごせるように、努力したいと思っている。